



2011年3月13日

いま起きつつあること…



自殺大国日本で

日本は今年で13年連続、3万人を超える自殺者を生み出してきた自殺大国です。国は長年、自殺を「個人の問題」として、関わることを避けてきました。しかし最近では、市民団体の活動も活発になり、自殺を「社会の問題」とし、さらに自殺は追い込まれた末の死であり、防ぐことのできる死である、と考えられるようになってきました。そこで今回考えてみたいのは、自殺と教会の責任です。教会は古くから自殺を罪とし、断罪してきました。また、そ

の一方で自殺を悼み悲しんだイギリスの牧師が始めた「いのちの電話」が日本でも広まっています。

今教会は、いや私たちは自殺という問題にどのように関わることができるでしょうか？ここで、私が2010年の7月に訪れた、白浜バプテスト教会の働きを紹介します。

白浜バプテスト教会の働き

和歌山県西牟婁郡白浜町には、断崖絶壁の名勝として知られる三段壁があります。壁下の海流が早く、浮き上がるのが困難なため、古くから自殺の名所とされてきました。大阪からわざわざ5日かけて歩いて来る人もいるほどです。1979年に先代の江見太郎牧師が白浜いのちの電話を開始し、自殺者救済に乗り出しました。そして1999年に藤敷庸一牧師に引き継がれ、2005年にNPO法人「白

浜レスキューネットワーク」として活動を開始しました。この活動は、大きく分けて3つあります。「自殺者救済活動」、「自立支援活動」、「自殺予防活動」です。

三段壁の公衆電話からかかってくる電話を受け、迎えに行き、相談に乗ります。その中の何人かは自宅に帰ったり、家族が迎えにきたりします。他の人はその日から教会で、自立を目指して共同生活を始めます。就職や自己破産など具体的支援と同時に心と体のケアを行います。

またこの教会には子どもたちのためのプログラムも多々あります。それは、子どもの時から生まれる孤独など、自殺の芽を早いうちから取るためです。

生きることはひとりではできない

私が訪ねた時には男女合わせて10名が共同生活をしてい

ました。「誰でもいいから助けてほしかった」「水一杯でもいいからほしかった」と、私よりも3倍も4倍も長く生きていた人たちが助けを求めていました。

彼らには、イエスさまが必要だと思いました。しかし、その前に、人が必要だと思えました。「死ぬことはひとりではできない。しかし生きることができない。しかし生きることはひとりではできない」(林田茂男『自殺論』三一書房)。人には人が必要です。私は、神さまの愛は人と人の間で現れると思います。

今日もどこかで約1000人の人が尊い命を落としています。「ちえまた人身事故か、あーあ電車が遅れちゃう」そう思っている人たちの背後で、今日も孤独な命が忘れ去られています。神さまの愛を知っている私たちは、彼らの隣人になることができるのではないのでしょうか？

(洪沢教会・古畑 普)